

# SHOW HEYシネマルーム

★★★★

## マグダレンの祈り

配給/アミューズピクチャーズ

2003 (平成15) 年9月9日鑑賞

<東映試写室>

Data

監督・脚本：ピーター・ミュラン

出演：アンヌ＝マリー・ダフ／ノー

ラ＝ジェーン・ヌーン／ドロ

シー・ダフィ

## 👁️👁️ みどころ

「墮落した」女性や娼婦のための避難場所、としてアイルランドのダブリンに設けられた、あたかも「女性刑務所」のようなマグダレン修道院の内幕を、3人の主人公を通じて描いた衝撃作品。ヴァチカンを激怒させながらも、2002年ヴェネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞したもの。宗教とは？キリスト教とは？修道院とは？を考え、勉強することが不可欠・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### <日本人にはなじみの薄い修道院の問題点>

日本人は、儀式としての宗教習慣はあるものの、一般的に宗教心は薄い。特にキリスト教に関してはそうだ。だから『ギャング・オブ・ニューヨーク』の映画評論にも書いたように、キリスト教の絡んだ映画では、キリスト教の基礎的知識についての理解が不可欠だ。

最近では、教会での結婚式が流行りだが、それも、ヴァージンロードを歩いて「神父」様による祝福を受けて・・・という単なるキリスト教的な婚礼の儀式がカッコいいとして憧れているだけ。「神の前で誓う」などと本気で考えている人はほとんどいないはずだ。

しかしキリスト教というのは、結構厳格な宗教で規律や戒律も多い。また長い歴史の中、宗派による対立や権力闘争も多い。「修道院」のあり方もキリスト教の歴史の流れの中でいろいろと変わってきたのも当然だ。

この映画に登場するマグダレン修道院は、19世紀に「墮落した女性や娼婦のための避難場所」としてアイルランドに設けられたもの。しかし20世紀に入ってからは、カトリック教会が厳格に運営するようになったため、「シスター」たちによって閉鎖的に運営され、いわば刑務所同様の施設となっていた問題の施設だ。

## <誰がこの施設に入るのか>

マグダレン修道院に「収容」されるのは、「キリスト教」的教えにそむいた女性、特に「性に対する犯罪」を犯したと見なされた女性だ。キリスト教の根本精神では「姦通の罪」を犯した女性も救われるはずだが、1960年代までのアイルランドのカトリック教会では、「性に対する罪」には特に厳しく、このような罪は「地獄に落ちる」ものと見なされていた。

従って、この映画に登場する、マグダレン修道院に収容される主人公の若い女性は、次の3人だ。

マーガレット・マグワイア（アンヌ＝マリー・ダフ）。映画の冒頭は結婚式のパーティ。歌と音楽とダンスの共演の中、従兄弟に誘われて控室に行ったマーガレットは、そこで突然レイプされた。会場に戻ったマーガレットは泣きながら、これを友人に打ち明けたが・・・。

何と、この「犯人」が処罰されるのではなく、「一族の不祥事」となったマーガレットが、教会と両親の命令によって、強制的にマグダレン修道院に収容されることになった。マーガレットを演ずるアンヌ＝マリー・ダフは、『エニグマ』（01年）でケイト・ウィンスレットと共演した美人女優だが、この映画ではその美しさを売りものにせず、苦難に耐える少女を演じている。

バーナデット（ノーラ＝ジェーン・ヌーン）。バーナデットは孤児の少女。彼女は、この映画のために1400人の中からオーディションで選ばれた、大きな目が印象的な美少女。彼女がマグダレン修道院に収容されたのは、彼女が周りの少年たちから声をかけられる人気モノだというだけのこと。つまり周りの男たちの心を惑わせる女だということだ。

ローズ・ダン／パトリシア（ドロシー・ダフィ）。彼女は「未婚の母」になったというだけの理由でマグダレン修道院へ収容された。当時のアイルランドの厳格なキリスト教の教えでは、「未婚の母」などということは絶対許されず、家族の恥とされていたわけだ。

## <マグダレン修道院での生活は・・・？>

マグダレン修道院での生活は厳格極まるもの。そのボスは修道院長のシスターだが、この院長をトップとするシスターの組織は軍隊と同じで、命令は絶対的なもの。修道院での「規律」正しい生活も軍隊そのものだし、労働の価値という大義名分のもとに毎日実施させる洗濯部屋での労働はまさに強制労働そのもの。外部との接触・連絡は一切許されず、労働中は一切の私語も禁止されるという、過酷な生活を余儀なくされていた。もちろん違反したり、逃亡しようとした者には厳しい折檻や虐待が待ち受けていた。外へ出られないまままでその一生を終わるといった女性もいたとのこと。

こんな刑務所のような修道院であったため、1950年代から60年代には暴動が多発したが、1996年に全廃されるまでこんな恐ろしい施設が現実に存在し、約3万人の女性がここで生活したということだ。

### <日本でもヒットして欲しいものだが>

最小限必要なキリスト教の知識を持って、マグダレン修道院の実態を真正面から見なければ、この映画が何を訴えたいのかを理解することは困難。

この「施設」の中に入れられた少女たちが、過酷な生活条件の下でいじめられ、虐げられているな、と思うだけ。そしてこの映画が描くストーリーはまさにそれだけのことだ。

しかし、なぜこんな生活が・・・？なぜ、彼女たちはそこに入れられたのか・・・？なぜ、これを救うことが出来ないのか・・・？そういういくつかの視点で修道院の問題を考えなければ、この映画の問題提起や価値は分からないし、ヴェネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞した意義も理解できないだろう。パンフレットに書かれてあるキリスト教についてのミニ知識も含めて大いに勉強することが必要だ。

2003（平成15）年9月10日記